



さくらんぼ

自ら動き、感じ、楽しむ
～笑顔あふれる幼稚園～

NO. 5 令和3年11月30日発行
山口大学教育学部附属幼稚園
URL:<http://www.ymg-kg@yamaguchi-u.ac.jp>

園庭の紅葉した木々の葉も散り、朝は肌寒く感じられるようになりました。2学期もあとひと月となり、子どもたちは友達関係も広がり、遊びがどんどん楽しくなっているようです。

11月は秋祭りや研究会など保護者の皆さんに様々なご協力をいただき、無事終わることができました。ありがとうございました。今回は、各学年の友達関係の育ちの姿をお伝えしたいと思います。

友達と一緒に楽しいな (花組)

先日、幼小中一貫教育実践研究発表会がありました。今年は“友達関係”をテーマに様々な園の先生方と意見交換を行いました。どの園でも話にあがったことは、この時期は「友達と一緒に楽しくなっている」「でもやっぱり一人一人のしたいこともある」「思いがぶつかることもあるが、言葉を知ったり友達の思いに気づいたりしている」ということでした。園によって遊び方はそれぞれ違っていても、子どもの成長段階は同じなのだと思います。やっぱりこの時期に友達へのかかわり方や相手の思いに触れる経験を重ねることが大事なのだと改めて実感しました。



ある日、列車で遊んでいたAくんがレールを長くつなげて線路をつくり始めました。そこに興味をもったBくんとCくんもやってきて、それぞれにレールをつなげたり橋や駅などを置いたりしていくと、大きな1つの線路が完成しました。子どもたちはそれぞれに好きな列車を選んで走らせていきました。Aくんは途中で脱線しかけると「もー!!」と怒りかけましたが、「この前お友達がゆっくりすると脱線しないよって教えてくれたね。」と声をかけると、そのことを思い出したように気持ちを立て直して再出発。Bくんは列車を走らせていくと、前に友達の列車があり、前に進めません。何も言わずにそのまま走らせ、友達の列車が崩れてしまいました。Cくんが「なんで壊すの!」と怒り、Bくんは怒られたと思ってわー!と泣き出します。「前に進みたかったんよ。『前に進んで』って言ったら分かってくれるよ。Cくんはいきなり壊されたと思ってびっくりしたんだよ。」と保育者が間に入って話をしました。お互いの気持ちを知らせながら、もう一度レールと列車を組み立てて走らせるとまた2人は笑顔になって楽しんでいました。その後、3人がそれぞれに自分の思いと友達の思いとがぶつかり、3回それぞれに泣く場

面がありました。しかし、成長したなと思うことは、3回も同じようにぶつかる場面があっても、3人ともその場からいなくならずに遊び続けたことです!友達と一緒に遊びたい思いが勝るようになったのだなと思うと、泣いている子どもを膝に抱えながら内心とても嬉しく思いました。友達とぶつかる中で、自分とは違う相手の思いに触れ、自分の実体験として友達とのかかわり方を学んでいると思っています。また、周りの子どもたちもよく保育者と友達のかかわり方をよく見ています。泣いている友達の涙をティッシュで拭いたり、「OOしたかったんだよね」と声をかけたり、まるで小さな保育者です。保育者や友達の言動を真似たくなる時期でもあり、良くも悪くも全てを吸収しています。友達と一緒に楽しくなってきた今だからこそ、花組の子どもたちなりに友達のことについて、一緒に考えていきたいなと思っています。(高橋)

風組電車がつくりたい! (風組)

牛乳パックで新幹線をつくらっている友達の様子をじっと見ていたAくんが「みんなが乗れる電車をつくりたい。」と言いました。「段ボールでつくったらいいんじゃない?」とBくんも加わり、教材室に段ボール箱探しに行きます。「これは小さすぎ。」「このくらい(自分たちが入れるくらいの大きさ)ならいいね。」と言いながら段ボール箱を選んで保育室に戻ると、「一体みんな何しよるん?」とCくんが来ました。Aくんが「これ風組電車。乗ってもいいよ。」と言うと「僕は新幹線がいいな。」と電車の隣で新幹線の先頭車両をつくり始めました。



Aくんたちの風組電車とCくんの新幹線がつながりましたが、それぞれの方向に出発したので、車両が真ん中でちぎれそうになりました。乗客だったDくんが「こっちが電車で、こっちが新幹線なん?」と困っていると、「こっちが前のときは電車で、こっちが前のときは新幹線になるってことでしょ!」とEくんが加わります。すると「僕が最初運転手ね。」「じゃあ、その次は僕!」「僕にもやらせて。」と言いながら風組電車・新幹線が走り出しました。そこに、お客さんになったり、自分でつくったカメラで走る電車の写真を撮ったり、踏切のバーを動かす人になったりと他の子どもたちもそれぞれが思いついた方法で遊びに入っていました。

友達も乗って一緒に遊べる電車をつくらうと考えたことや、一人の思いついたことをきっかけに、次々に子どもたちが集まって来て、一緒に遊びだす姿を見て、友達関係がクラスや学年の友達へと広がっていているのだと感じ嬉しく思いました。また、風組電車やその他の遊びでも、自分たちで遊びに必要なものをつくりたり、チケットをつくらせてお客さんに来てもらおうとしたりする姿が見られます。これまでの経験を活かしながら遊ぶ姿を見て、これまでの遊びや生活が今につながっていて、今日の遊びも明日につながっていくのだと実感しました。子どもたちの成長が頼もしく思えた実りの秋でした。(中原)

みんなで進めた秋まつり (星組)

星組は、秋まつりで探検コースとお店屋を担当することになり、どんなことがしたいかを相談する機会をつくりました。虫が好きな子どもたちから、探検コースに「虫の博物館があるといい。」と意見が出て、廃材で剣や銃をつくっている子どもたちからは「武器の博物館をする。」という意見も出ました。女兒はビニール袋に新聞紙の詰め物をしたものでぬいぐるみをつくっていたこともあり、「ぬいぐるみとかお化けが出てくるのはどうですか?」という意見が出ました。「お化けやしきは花組さんが怖がるんじゃない」という話になり、「怖くないけどびっくりさせるのはどう?」というアイデアが出ました。「それならいいね。」と同意する声が上がると、探検コースには「虫の博物館」と「武器の博物館」、ぬいぐるみとお化けの家をつくることになりました。



翌日からは、図鑑を真ん中において4、5人の男児がお気に入りの虫を描いては切り取り、大判用紙に貼っていく姿が見られました。「虫がとまる木がいるんじゃない。」「池もいるね。それと川も描こう。」と相談しながら進めていました。その様子を見ていた女兒が「いきものはくぶんかんへようこそ」という看板をつくり、男児に見せ「いいね。」と喜ばれ張り付ける姿が見られました。

武器博物館は、家に持ち帰っていたものも園に持ってきて、友達と飾る場所や飾り方を相談しながら飾っていました。ぬいぐるみとお化けの家の子供たちは、新しいぬいぐるみをつくったり、家族ごっこで使っていた家に窓やドアを付けたりし、ぬいぐるみやお化けを窓から出すことを試していました。

その頃、遊びで釣りのゲームを始めていた子どもたちがその遊びを「秋まつりでしよう」と言い出したので、降園時の集まりの時間にどんな遊びなのかをクラスの友達に紹介する機会をつくりました。トレーを二つ合わせたものが魚の口で、そこへ紐の先に付けたエサを投げ入れ、トレーに入ると魚役の子どもがトレーの口を閉じて釣った人に手ごたえがあるように引っ張り、だんだん力を弱め最後は手を放し釣りあげられる遊び方でした。説明を聞いたり試しにやらせてもらったりして楽しんだ後、「秋まつりにするのはどう?」と聞くと、「トレーではなく魚の形にしたらどう?」という意見が出ました。魚釣りを提案した子どもが「いいね。」と同意し「僕は、リュウグウノツカイを描く。」「僕は、マンボウ描こうか?」「サメもいいんじゃない。」と話が進み、翌日は魚図鑑を囲んで描き、様々な魚ができました。

紙の魚になり、釣り竿を代えなくてはならなくなり、エサの代わりに洗濯ばさみを付けて魚を挟むことになりました。試しにやってみると魚を引っ張りすぎるとすぐに外れて、なかなか釣れない状況になり、「これじゃあ花組さん難しいよね。」と気づき自分達で相談しました。「花組がお客の時には引っ張らない。」ということが決まり、秋まつりでは、花組も楽しめる魚釣りとなりました。(高田)